

# 大宮盆栽 次の100年に向けて

## ～令和7年 大宮盆栽村は100周年を迎えます～



主席研究員  
間藤 雅夫

### はじめに

大正14年(1925年)に開村した大宮盆栽村は、世界的な盆栽の聖地として世界中から盆栽愛好家が訪れる場所となり、令和7年(2025年)に開村100周年を迎える。しかしながら、かつて30以上あった盆栽園は、盆栽業の衰退や人々のライフスタイルの変化と相まって、園主の高齢化や後継者不足などから盆栽園の数は減少し、現在は6園となっている。今後も盆栽園の減少が予想され、大宮盆栽村の消滅が危惧されている。

さいたま市は、大宮盆栽の伝統や文化を守りその技術の継承を図るべく、「大宮盆栽振興策」や「大宮盆栽これからの100年に向けたビジョン」の検討を始めた。

この100年で「盆栽の聖地」と呼ばれるに至った大宮盆栽村の歴史を概観し、次の100年に向けた大宮盆栽村のあり方について考えてみたい。

### 大宮盆栽村とは

大宮盆栽村とは、東武アーバンパークライン(野田線)とJR宇都宮線に囲まれた大宮公園北側一帯の総称で、我が国屈指の盆栽郷として知られている。住所は「埼玉県さいたま市北区盆栽町」、町名に「盆栽」の名が入る、正真正銘の盆栽の聖地である。現在の道路幅は開村当時のままで、ほぼ碁盤の目状に造られ、道の両側にはさくら、もみじ、かえで、けやきなどの木々が植えられ、それらの道は「けやき通り」「もみじ通り」など植えられた木の名前が付けられ、盆栽四季の道と呼ばれている。

大宮盆栽村には大宮盆栽組合加盟の5つの盆栽園があり、それぞれ特色ある盆栽を手掛け、四季

折々の樹影は見る人の心を楽しませている。隣接する土呂町には、さいたま市立大宮盆栽美術館があり、海外からも多くの観光客が訪れている。また毎年

5月3日～5日に開催される「大盆栽まつり」は、国内のみならず海外の盆栽愛好家も多く訪れる一大イベントである。

### ●大宮盆栽村地図



資料:大宮盆栽村にて撮影

### 大宮盆栽村の誕生

20世紀の初頭、東京の盆栽職人たちは、盆栽に必要な広い土地や盆栽に適した良質な土や水を求めていた。この頃、既に東京は急速な工業化に伴って蔓延した公害によって、繊細な「生ける芸術」である盆栽には不適な環境となっていた。

そして、1923年9月の関東大震災により東京駒込、巣鴨、本郷などの盆栽業者が被災し、これを機に集団で郊外に移転する計画が立てられた。大宮が移転先に選ばれたのは、交通の便が良く、氷川神社や大宮公園に隣接する立地環境、澄んだ空気と良質な地下水、大宮の土壌の良さが背景にあった。さらに、村長や地元の議員を中心に受け入れ側の熱意も大きな要因であった。1925年4月、清水利太郎氏(清大園)が最初の移住者として当地に居を構え、ここに大宮盆栽村が誕生した。

## 大宮盆栽村のこれまでの100年(略史)

1925年の清大園の移住後、急速に村づくりが進み、1928年には組合員約20名の「盆栽村組合」が発足した。この時、「ここに居住する人は盆栽を10鉢以上持つこと」などの居住条件を取り決めたユニークな規約が定められた。戦前の盆栽村は盆栽栽培の中心地であり、第二次世界大戦に至るまでの間、最盛期には35の盆栽園があったと記録されている。1929年に総武鉄道(現東武鉄道)が開通し大宮公園駅が出来ると、宅地化が進展して人口が増加し、1942年に行政地名「盆栽町」となった。

戦時中、盆栽はぜいたく品とされ、盆栽業者の廃業や転業が増えた。しかし戦後になると、GHQの将校たちが盆栽に注目し、その後、吉田茂、岸信介、佐藤栄作など歴代の首相をはじめ国内外の政治家や著名人が盆栽村を訪れた。

盆栽が世間の注目を集めるきっかけとなったのは、1964年の東京オリンピックと1970年の大阪万博だった。東京オリンピック会期中に開催された「東京オリンピック協賛盆栽水石展」では大宮盆栽村からも数十点が出品され、さらに大宮盆栽村では英文パンフレットを準備するなど外国人の受け入れ態勢が

### ●大宮盆栽村100年の歴史

年	出来事
1925	関東大震災の2年後、東京の盆栽業者が移転し大宮盆栽村発足
1928	全住民(20名)による「盆栽村組合」発足。居住条件を定めた規約作成
1929	総武鉄道(現東武鉄道)開通(大宮～岩槻)。大宮公園駅できる
1935	開村10周年(業者24軒)。盆栽大交換会開催(参加業者200名) 政財界で盆栽が大人気となる
1940	11月、大宮市市制施行
1942	盆栽村、行政町名「大宮市盆栽町」となる(戸数60/人口約300)。
1947	業者を対象に「大宮盆栽組合」発足
1950	はとバスによる外国人客等盆栽村への来訪者増える
1964	東京オリンピック協賛、盆栽・水石展に出品
1965	「日本盆栽協会」発足(初代会長吉田茂) 村内道路をやなぎ通り、さくら通り、かえで通り、もみじ通りと命名
1966	「大宮市漫画会館」開館
1970	万国博覧会に多数の名品を出品 万博を機に外国人来訪者が急増。弟子入り志願も急増
1974	盆栽村開村50周年記念事業
1984	盆栽村開村60周年記念事業として第1回「大宮大盆栽まつり」開催
1989	旧大宮市内で第1回世界盆栽大会開催。約30か国・地域が参加
1997	盆栽町が国土交通省の「都市景観100選」に選ばれる
2001	浦和/大宮/与野3市合併でさいたま市誕生。
2002	盆栽村開村80周年記念行事開催
2003	さいたま市政令指定都市移行、区政施行。行政町名「さいたま市北区盆栽町」
2008	大宮盆栽組合を大宮盆栽協同組合に改組 「大宮の盆栽」をさいたま市伝統産業に指定
2010	「さいたま市大宮盆栽美術館」開館
2017	第8回世界盆栽大会開催。約40か国・地域が参加
2025	大宮盆栽村が開村100周年を迎える

資料:九霞園年表「盆栽村80年の歩み」をもとに作成

整えられた。一方、大阪万博では政府出展で「日本万国博覧会盆栽水石展」が開催され、来場者数250万人を記録し、さらに大宮盆栽村がテレビ中継され、国内外に大宮盆栽村の名前が知られる機会となった。この2つの世界的なイベントを経て、盆栽は国内外に広がった。

大阪万博後、世界各国で盆栽愛好家団体の活動が盛んになり、盆栽関係者の国際的つながりが生まれたことで、1989年に初の「世界盆栽大会」が旧大宮市のソニックシティで開催された。その後は4年ごとに世界各国で実施されるようになり、2017年には2回目の日本開催となる第8回大会がさいたま市で開催され、40を超える国と地域からの来場者で大いに賑わった。そして、来年4月に大宮盆栽村は開村100周年を迎える。

## なぜ大宮は盆栽の聖地と呼ばれるのか

ところで、なぜ、大宮盆栽村は「盆栽の聖地」と呼ばれるようになったのか。大宮盆栽美術館の資料によれば、そこには大宮に移住してきた盆栽師達の技術の向上への努力の歴史がある。

### ①未開の樹種であった蝦夷松を盆栽に仕立てた

昭和初期、蝦夷松は「枯れるもの」「培養困難」と言われていたが、その採取・培養方法に取り組んだのが大宮盆栽村の盆栽師だった。蝦夷松が自生する国後島まで足を運び原産地の状況や採取、根付け等の培養・管理方法を確立した。蝦夷松盆栽の普及とともに、大宮盆栽村の名が全国に広がった。

### ②五葉松を鉢に根付かせる方法に成功

鉢に根付かないと考えられていた山採りの五葉松を鉢に根付かせる培養方法に成功したのも大宮盆栽村の盆栽師だった。以後、数々の山採り五葉松の銘木が生み出された。

### ③盆栽専用の手入れ道具の開発

大宮盆栽村の盆栽師は埼玉県川口市の鍛冶職人と共に盆栽専用の手入れ道具を開発し、盆栽の整形の技術の発展に大きく貢献した。また、陶工を雇い、

自作の盆器を創出する盆栽師もいた。

こうした、盆栽技術向上の不断の努力により、「技術の大宮」と呼ばれるようになったのである。

## 大宮盆栽を取り巻く環境の変化

大宮盆栽村は先人たちのたゆまぬ努力の結果、盆栽の聖地と呼ばれるまでになったが、大宮盆栽村の現状は、盆栽園の減少に歯止めがかからず盆栽園の存続が喫緊の課題となっている。大宮盆栽の次の100年を考える時、園主の高齢化、後継者不足、高い地価と相続税などの問題があげられるが、他にも次のような盆栽業の変化に対する課題もある。

①現在の盆栽園は、仕入れてすぐ売るバイヤーの活動が主流となり、盆栽の創作活動をじっくり行う時間が無くなった。②盆栽の大衆化・国際化が進み、多様化した顧客への対応が求められる。③高松等全国の産地や盆栽師が台頭し、大宮盆栽のブランド価値が薄れてきた。

以上のように、大宮盆栽を取り巻く環境は、非常に厳しいと言わざるを得ない。一方で、次の100年の担い手となる若手盆栽師達が、大宮に存在している。さいたま市は、大宮盆栽の次の100年を担う若手盆栽師を集めた勉強会を令和4年度後半から立ち上げた。勉強会では、市の若手職員も参加し、①令和7年大宮盆栽村100周年の事業を考える、②自らの自立を含めた次の100年に向けた盆栽園の在り方考える、③地元経済界等との連携を含めた次の100年に向けた盆栽村の在り方考える、をテーマにして活動を行っている。

## 若手盆栽師勉強会(大宮盆栽若手の会)の取り組み

若手盆栽師勉強会に参加している盆栽師は、いずれもこれからの大宮盆栽を担う人材である。現時点での彼らの将来イメージは、独立開園、現在の盆栽園の継承、素材から盆栽を創作する盆栽作家、盆栽教室の運営、大宮盆栽・盆栽師の支援業務など様々である。しかし、勉強会に参加している盆栽師は、「盆

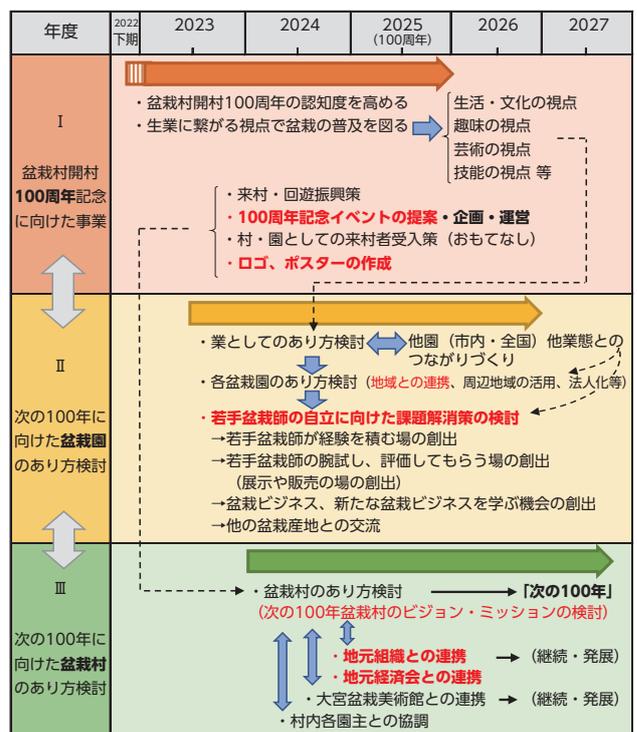
栽園が所有・管理する盆栽を後世に残したい。盆栽園の閉園による良い盆栽の流出は避けたいし、大宮盆栽村が消滅する状況は望ましくない。次の100年に向けて大宮盆栽村や盆栽園を残すためにどうすればよいかを考えて実行したい」という。皆思いは同じようだ。

若手盆栽師勉強会では、大宮盆栽村開村100周年事業のアイデアとその実現について、以下の取り組みを行ってきた。

- ①開村100周年ポスター、ロゴマークの作成
- ②埼玉県人会、賀詞交歓会での経済界へのPR
- ③大宮氷川神社とのコラボ(氷川マルシェ参加)
- ④市内企業との連携検討
- ⑤ホンダレーシングチームとコラボしたPR
- ⑥市内での開村100周年PRイベントへの参加
- ⑦大宮盆栽 次の100年に向けたビジョン策定

今後、若手盆栽師勉強会では、大宮盆栽の新たなビジネスモデルや地元企業との連携、盆栽に興味を持つ若い人の取込み、自分たちの将来イメージ(自

## ●大宮盆栽若手盆栽師勉強会の活動(令和7年盆栽村開村100周年 次の100年に向けた大宮盆栽のあり方)



資料:若手盆栽師勉強会事務局(埼玉りそな産業経済振興財団)作成

立等)の実現に注力する予定である。

## 大宮盆栽存続に向けた方策

かつての大宮盆栽の隆盛を知る大宮盆栽村出身の盆栽師や若手盆栽師勉強会での話などから、次の100年に向けた大宮盆栽を維持・存続する方策を考えてみた。

### 1. 盆栽を創作する若手盆栽師の育成

#### ①盆栽を素材から創る若手盆栽師の育成

素材から盆栽を作り上げる盆栽職人、良い樹を生み出す盆栽師が、今の大宮には必要である。大宮盆栽のこれからの100年には良い作り手が欠かせない。

#### ②若手盆栽師中心の展示会の開催(箔付け)

大宮には大きな盆栽の展示会がない。大宮盆栽村100周年をきっかけに、大宮独自の展示会として若手盆栽師の登竜門的な展示会を開催する。

#### ③盆栽ビジネスを身につける機会の提供

盆栽園よりも敷居は低い、量的に充実した展示販売所を常設し、若手盆栽師が作品を販売することで市場の反応を直に感じる場を創設する。

### 2. 新たな弟子の育成手法の検討

大宮盆栽の特徴は、個性を持った盆栽園の存在だが、今、各盆栽園の個性が薄れている。各盆栽園の特徴を体現できる人材育成のため、①盆栽園単位の弟子育成ではなく各盆栽園で学べるシステムや、②出がいこシステム(仮)を構築する。

### 3. 若手盆栽師の活動場所の創出

#### ①新たな盆栽村を創る

大宮盆栽美術館はまちなかの文化発信拠点として位置づけ、見沼区や緑区に第2の盆栽村をつくる。

#### ②自由度が高い若手盆栽師育成の用地を創る

盆栽を創作する人材育成の場を見沼区等に創出する。そこは行政が用地買収し、用地を確保した上で盆栽師を育成する。自立出来た盆栽師は用地を買い取り、自立出来なかった場合は退去する等の自由度が高い用地活用を検討する。

### 4. 大宮の盆栽園の姿を伝える施設の検討

盆栽園が無くなれば、大宮盆栽村の由来を後世に伝える手段も無くなる。大宮盆栽村の盆栽園の風情を残す施設が、将来的に村内にあってもよい。

### 5. 大宮盆栽を守る新たな組織の創設の検討

大宮盆栽は、各盆栽園が所有・管理する「樹」そのものとも言える。各盆栽園の「樹」を良い状態で、次世代につなぐ「盆栽づくり会社」、若手盆栽師の自立を支援する盆栽版まちづくり会社的な組織を創設する。また、経済界を中心とした大宮盆栽支援の集まりを組織し、若手の独立支援を目的とした盆栽ファンド等も検討したい。

### 6. 盆栽周辺ビジネスと氷川神社とのコラボ商品

外国人旅行客向けに、小銭で買える盆栽トレーディングカード等を開発して空港で販売する。また、大宮盆栽ガチャの開発なども面白い。さらに、2028年に御鎮座2500年を迎える氷川神社ゆかりの挿し木の販売(お祓い済み)やデザイン鉢など、氷川神社とのコラボ商品を開発する。量産・ネット通販等ができればビジネスとして成り立つ可能性がある。

## 次の100年に向けて

今年9月、若手盆栽師勉強会では、盆栽町に本社を置くM&Kマネジメント(株)と連携して、もてぎサーキットを走るレーシングカーに盆栽村100周年のロゴを添付、ピットウォーク時に盆栽展示を行った。このような地元企業、地元経済界との連携は、大宮盆栽 次の100年にとっては非常に重要と考える。こうした取り組みがさらに進み、将来、地元経済界による大宮盆栽応援団的な組織が出来ることを期待したい。また、盆栽村の住民が中心となり立ち上げた盆栽村まちづくり協議会では、盆栽村の景観維持を目的とした活動を始めている。

100年前には何もなかった土地から「大宮盆栽」を世に知らしめた先人たちのように、次の100年を見据え、世界に誇る「大宮盆栽」を後世に引き継ぐことは、盆栽園、地元住民や行政のみならず、大宮盆栽に関わる全ての者の使命ではないだろうか。